

必携
慣用句
辞典

倉持保男・阪田雪子編

必携 慣用句 辞典

倉持保男・阪田雪子編

三省堂

1982 年 3 月 1 日 発行

必携慣用句辞典

定価 八〇〇円

一九八二年三月一日 第一刷発行

編者 倉持保男（くらもち・やすお）

阪田雪子（さかた・ゆきこ）

発行者 株式会社三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 三省堂印刷株式会社

発行所 株式会社三省堂

〒102 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集（〇三）二三〇九四二

販売（〇三）二三〇九四三

総務（〇三）二三〇九五二

振替口座 東京六〇四三〇〇

〈必携慣用句・352 pp.〉

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

前　書　　き

わたしたちは、日常の会話や文章表現の中で、数多くの慣用句を用いています。たとえば、「大学を出たのに、まだ親の臍^{すね}をかじっている」というときの「親の臍をかじる」は「経済的な独立ができず、親の世話になる」という意を表わしています。この「親の臍をかじる」のように、二つ以上の単語が決まった結びつきをしているもので、それぞれの単語の意味をただつなぎ合わせても理解できない別の意味を表わすものを慣用句とよんできます。同じ「骨を折る」という言葉でも、「スキーで転んで、足の骨を折った」というのは普通の言い回しで慣用句ではありませんが、「職を探すのに骨を折った」というのは慣用句だというわけです。

慣用句は、個々の単語から連想されるイメージを巧みに生かしているものが多く、同じ内容を他の言葉で表現するよりも、受け手に強く訴えかける効果があります。慣用句を適

切に使うことによつて、表現が豊かになり、しかも生き生きとしてきます。また、慣用句をよく知っていれば、他人の話や文章を十分に理解できなかつたり、とんでもない誤解をしたりすることが少なくなり、それだけ言葉の理解を深めることができます。

本書は、日常よく用いられる慣用句を集め、分かりやすく意味を解説しました。さらに、適切な用例を示して、その句の用法が的確に分かり使用することができるようになりました。慣用句の正しい理解と使用を通し、みなさんの言語生活をより豊かにするためにお役に立つことを願っております。

昭和五十六年十二月

編 者

凡 例

一、見出し 日常の言語生活で使用度数が高いと考えられる慣用句を約三千五百項目選出、漢字仮名まじりの形で、五十音順に配列した。

二、意味・説明 一読して意味・用法が理解できるように、できるだけ平易明解な説明を施した。その際、類義的な他の慣用句との意味・用法の差異が示せるように心掛けた。また、句の由来や原義などで特に意味の理解に役立つと思われるものを()に入れて示した。

三、用例 語釈の後に用例を付し、意味・用法がよりいっそう的確に把握できるようにした。なお、使用場面の違いなどに応じて、いくつかの意味・説明が併記されている場合も、用例はより一般的なものを一例あげるにとどめた。他は類推していただきたい。

四、類句 見出しの句とほぼ同義に用いられる句を、用

例の後に〔類句〕として示した。〔類句〕として取り上げた句の大部分は、意味・用法を見出しのそれに準じてとらえてよいので、一応は独立の見出しとして立てたが、説明や用例を付けることはしなかった。

なお、助詞の小さな異同や本来の句の省略などによって生じた、見出しの句との小さなずれは、語釈末にその形を示し、〔類句〕としては取り上げなかった。

例 命拾いをする…… 「命を拾う」とも。

海老で鯛をつる…… 略して、「海老鯛」とも。

五、自動詞形・他動詞形 見出しの句に対応する自動詞形または他動詞形を、それぞれ用例の後に〔直他〕として示した。

例 証を立てる…… 〔直〕証が立つ

足が出る…… 〔他〕足を出す

ただし、「愛想が尽きる」と「愛想を尽かす」のようなのは、形式的には一見、自・他の対応関係にあるとみられるが、「彼には私もほとんど愛想が尽きた」

「彼には私もほとほと愛想を尽かした」のように、用法の上ではいわゆる自・他の関係が認められないので、これらの類は単に〔類句〕として扱った。

例 生地が出る……〔類句〕 生地を出す

六、反意の句 見出しの句に対応する反意の句は、〔反封〕として用例の後に付した。

例 受けがいい……〔反封〕 受けが悪い

七、他の見出しへの参照 ↓によって参照すべき他の見出しを示した。

1 見出しに続けて付した↓〔類句〕または〔直題〕などとして扱った句で、独立の見出しとして立てたものに付した。ただし、それらが相互に比較的近い位置に配列される場合は、見出しを立てなかつた。

例 泡を吹かせる ↓一泡吹かせる

足を出す ↓足が出る

2 項目の末尾に付した↓意味や句の由来に何らかの深い関係があり、相互に参照することが句の理解

を深めるのに役立つものに付した。

例 十指の指す所…… ↓十目の見る所

十日の菊…… ↓六日の菖蒲

八、用字 原則として常用漢字・現代かなづかいを用いたが、常用漢字外であっても、伝統的な表記として一般的なものには広く用いた。ただし、それらには振り仮名を付して読みの便を図った。

あ

ああ言えばこう言う いろいろと理屈を並べ、相手の意見に素直に従おうとしない様子。「まったくこの子にはあきれたね。ああ言えばこう言うで、少しも人の言うことを聞こうとしないのだから」

愛敬を振りまく だれかれの区別なく、周囲の人々に明るくにこやかな態度で接する。「いつもは威張っているあの男が、今度の選挙に立候補するためか、今日はやたらに愛敬を振りまいている」

合言葉にする 仲間同士の結束を図り、行動の目標を明確に示すために、自分たちの主義・主張を端的に表わした言葉を掲げ、その実践に努める。「民主主義を合言葉にしてきた戦後政治も、最近の一つの転換期に差し加かってきたようだ」

愛想が尽きる いくらこちらが好意を示しても一向に通じない相手の態度にあきれ果て、もう相手にするのはやめようという気持になる。「あいそ」は「あいそう」とも。「分からずやのあの子には、もう愛想が尽きた」

【類句】愛想を尽かす

開いた口が塞がらない あまりのひどさに、あきれ返っている様子。「あまりのばかさかげんに、開いた口が塞がらなかった」

相槌を打つ 相手の話を聞きながら同感の意を表わしてうなずいたりする。また、相手の話に調子を合わせ「相槌を打ちながら、熱心に話に聞き入る」

合の手を入れる (邦楽で、唄と唄との間に楽器の演奏を入れる意から) 他の人の話の間に、それを調子づけるような掛け声などを差しはさむ。「聴衆が合の手を入れるのに気をよくして、演説に一段と熱が入る」

愛の鞭 相手の将来に対する思いやりから、涙を呑んで、あえて厳しい態度に出ること。「あの学生を停学処

あ

分にしたのは、教育者としての愛の鞭だ」

合間を縫う 仕事などの合間のわずかな時間を利用して何かを行なう。「仕事の合間を縫って、二か月ぶりに床屋に行ってきた」

阿吽の呼吸 「阿吽」は出す息と吸う息の意。相撲の仕切りなど、二人以上が一緒に何かをする時、互いの気がぴたり合うこと。「阿吽の呼吸が合って、両力士が同時に立ち上がった」

青息吐息 「青息」は青ざめた顔をしてつくため息の意。「吐息」は語調を整えるためのもの。困難な状況から抜け出すうまい策が見いだせず、弱り切っている様子。「年末なのに資金繰りがつかず、青息吐息だ」

青くなる 顔から血の気が消えうせる意で、何かにひどく驚いたりおびえたりする様子。「チンピラに絡まれたが、一喝したら青くなって逃げて行ってしまった」
青写真を描く 《青写真が設計図に用いられることから》
将来の計画を立ててみる。「頭の中にはすでに定年後

の青写真が描かれている」

青筋を立てる 額に静脈の青い筋を浮き上がらせる意で、ひどく怒って、けわしい表情になる様子。「額に青筋を立てて怒る」

青田買い 《戦前、米穀商が農家を相手に稲の取入れ前に収穫高を見越して行なった先買いの意》企業が人材確保のために、卒業年次になったばかりの学生の採用を早ばやと決めてしまうこと。「青田買いをあまり派手にやられると、四年生が落ち着かなくなって困る」

青菜に塩 《青菜に塩をふりかけると、しおれてしまうことから》すっかり元気をなくして、しおれている様子。「彼は入社試験に落ちて、青菜に塩の状態だ」

煽りを食う ①強い風の衝撃を受ける。「爆風の煽りを食って一〇メートルも吹き飛ばされた」②状況などの激しい変化の影響を受けて、痛手をこうむる。「円高の煽りを食って経営が苦しい」

垢が抜ける 容姿・身のこなし・服装などが都会風の洗

あ

練されたものになり、やぼったい感じがなくなる。

「垢抜けする」とも。「東京で大学生活をするうちに、

あの子も垢が抜けてきたね」

足掻きが取れない 局面を打解する手だてがなく、どう

しようもない。「何とかしたいと思っても、この不景気

では足掻きが取れない」

赤くなる 顔に血が上る意で、恥ずかしくて居たたまれ

ないような思いをする様子。「聞いている方が顔が赤

くなるようなことを、人前でよく言えるね」

赤子の手を捻るよう 弱い相手を難なく負かす様子。ま

た、無抵抗なものに暴力を振るう様子。「今日の試合は

相手が弱過ぎて、赤子の手を捻るようなものだった」

【類句】赤子の腕を振るよう

証を立てる 自分が潔白であることを証明する。「自ら

真犯人をつきとめ、身の証を立てた」 証が立つ

赤信号が付く 事態が差し迫ってきて、緊急に対策を講

じなければならぬ状態になる。「空梅雨に終わり、

東京の水不足に赤信号が付くのは必至だ」

赤の他人 (「赤」は「純然たる」の意) 縁もゆかりもな

い全くの他人。「もう、今日から君とは赤の他人だ」

赤恥をかく (「赤恥」は「恥」を強めた言い方) 人前で

ひどい恥をかく。「みんな正装をして来ていたのに、私

だけ平服でとんだ赤恥をかいだ」

飽きが来る 初めは満足していた物事が、長く接したり、

し続けたりしているうちに嫌になってくる。「こういう

う派手な柄は、初めのうちはいいが、そのうちに飽き

が来ると思う」

秋風が立つ (「秋」を「飽き」にかけて言う) 男女間の

愛情が冷えてしまった様子。「交際が長過ぎたせいか、

あの二人の間には、秋風が立ち始めたようだ」

灰汁が強い 個性が強過ぎて、接する人々に抵抗を感じ

させる様子。人の性質や書いた文章などについて用い

る。「今年の新人賞を取った小説は、灰汁が強い文章だ

が、なかなか迫力のある作品だ」

あ

灰汁が抜ける 強い自己主張や独断的なところなどがなくなり、人に接する態度が洗練される。「あの人は管理職になったら、上と下からもまれたためか、灰汁が抜けてきた」

悪女の深情け 容貌の醜い女性は、美人よりも情がこまやかで、また嫉妬深いものだということ。俗に、ありがた迷惑の意にも用いる。「悪女の深情けとやらで、彼は木村さんに惚れ込まれ、弱っているようだ」

アクセントを置く 全体の中で、特にそのことに重点を置く。また、全体の調子を引き締めるために、特にその部分を目立たせる。「防衛力の増強にアクセントを置いた予算編成」

悪銭身に付かず ばくちなどで得た金や働かず得た金は、そのありがたみが分からないために無駄に使われ、すぐに無くなってしまうものだということ。「競馬で大穴を当てたが、悪銭身に付かずで、あつという間に使ってしまった」

悪態をつく 相手を口汚なくのしる。「借金を断われ、悪態をついて帰って行った」

悪の温床 人を悪事に誘い込む原因を作り出している、好ましくない環境。「大都会の歓楽街は悪の温床だ」

欠伸を噛み殺す 出かかった欠伸を無理に止める意で、すっかり飽きてしまつて、いやいやながら、やむを得ず何かをし続けること。「校長の話を生徒は欠伸を噛み殺しながら聞いている」

あぐらをかく 「あぐらをかく」のは楽な座り方であることから「安全な地位を得て、いい気になつてのんきに構えている」「彼が社長の座にあぐらをかいていられるのも長くはあるまい」

揚げ足を取る 相手のちよつとした間違いなどを取り上げて、皮肉を言つたりからかつたりする。「あいつは人の言葉じりをとらえて、揚げ足ばかり取っている」

揚句の果て 「揚句」は「挙句」の意で、連歌の最後の句。さんさん何かをした末に、最終的な事態に至る様

あ

子。多く、好ましくない、また、予想外の結果になる場合に用いる。「些細なことから口論となり、揚句の果ては殴り合いの喧嘩になった」

上げ潮に乗る 時機を得て、物事が順調に進む。「事業は上げ潮に乗って急速に発展した」

上げたり下げたり ある点を褒めたかと思えば、すぐ他の点をけなしたりして、どっちが本音なのかつかみどころがない様子。「あの人の美術評は上げたり下げたりで、結局何が言いたいのかわからない」

明けても暮れても 毎日毎日変わりなく、同じような状態が続いたり同じことを続けたりする様子。「彼女は明けても暮れても死んだ恋人のことばかりよくよく考

えているようだ」

顎が落ちそう 非常に味がいいと感じる様子。「おいしくて顎が落ちそうだ」

顎が外れる おかしくて、笑いが止まらなくなるほど大笑いをする様子。「彼の滑稽なしぐさに、みんな顎が外

れるほど笑いこぼれた」

顎が干上がる 生計が立たなくなる。「僕らの商売は、こう雨ばかり続いたのでは顎が干上がってしまう」

顎が干上がる・鼻の下が干上がる

顎で使う 自分では何もせず、高慢な態度で人をこき使う。「顎の先で使う」とも。「最近の子供は親を顎で使うような態度をとっている」

顎をしゃくる 何かを指示するのに、無言で顎をその方に向けて示す。多く、見下した態度で相手に何かを指示する動作を表わす。「いくら部長でも、顎をしゃくって部下に用を言い付けるのはひどい」

顎を出す (長距離を歩いて疲れると、足が先に進まず、顎が前に出たかっこうになることから) 疲れ果てて、歩き続ける氣力を失う。また、仕事などがうまく進まず困り果てる。「頂上はおろか三台目で早くも顎を出した」

顎を撫でる どんなものだと言わんばかりに、得意げに

あ

自分を誇示する動作を表わす。また、物事が思い通りにならず憮然とした顔つきをする意にも用いる。「老人は孫を相手に、顎を撫でながら自慢話を始めた」

明後日の方 全く見当違いの方向。「そんな明後日の方を探したって、見つかりっこないよ」

朝飯前 (朝食前のわずかな時間でできるということから) そのことをするのがきわめて容易であること。

「そんなことは朝飯前だ」

足が重い どこかに行かなければいけないと思いながらも、気が進まず、なかなかその気になれないでいる様子。「見舞いに行かなければと思うのだが、癌で助からないことが分かっているので、足が重くなる」

足が地に付かない 氣持が落ち着かず、行動にしっかりと着き落着きの見られない様子。「あの男は氣が多過ぎで、何をやっても足が地に付かない」

足が付く ①逃げた者の足取りが分かる。「地道な聞き込み捜査で、犯人の足が付いた」②何かが手掛りとなつ

て、だれの犯行か露見する。「現場に落ちていたハンカチから足が付いた」

足が出る 出費が多く、予定していた金が足りなくなつた。①「予定より一万円ぐらい足が出たが、予備費でまかした」②「足を足を出す」

足が遠のく 以前のようにはそこを訪れることが少なくなる。「母親が死んでからは、実家へもすっかり足が遠のいてしまった」

足が早い ①食べ物腐りやすく、長持ちしない。「生魚は足が早いから氣をつけなさい」②商品の売行きがいい。「今度の新製品は思ったより足が早く、生産が追いつかない」

足が棒になる 長く立ち続けたり、歩き続けたりして足が疲れ、思うように動かなくなる。「一日中立ちっ放しで、足が棒になった」

足が向く 歩いていると、無意識のうちにその方に向かつて進んでいる。「まっすぐ家に帰ろうと思って会社

あ

を出たが、自然と行きつけの飲み屋の方に足が向いてしまった」

足蹴にする　そうするいわれのない人に対して、ひどい仕打ちをする。「立身出世のために恩人を足蹴にするとはあきれた奴だ」

明日は明日の風が吹く　今日どんなに嫌なことがあっても、明日は事情が変わっていいことがあるかもしれないの意で、過ぎたことや先々のことでよくよししても始まらないという楽観的な考えを表わした言葉。「いまさら済んでしまったことを後悔してもしかたがない。『明日は明日の風が吹く』だ」

足手まといになる　何かと面倒を見てやらなければならず、その人の行動の妨げになる。妻子があるために夫が思うように活動できなかったり、一団の中に世話の焼ける者が居るため、全体の行動が束縛されたりする場合に用いる。「君のように体の弱い人は、かえって探検隊の足手まといになる」

足留めを食う　何かの事情で外出が禁じられたり、そこから先へ進めなくなったりする。「危険だからホテルから出てはいけないうと、足留めを食っている」

味なことをやる　思いがけなく、気のきいた、巧みなことをやる。「味をやる」とも。「君も見かけによらず、

なかなか味なことをやるね」

足並みが揃う　一緒に何かをしようとする人たちの活動方針が一致して、統一行動がとれるようになる。「各組合の足並みが揃わず、予定されていた統一ストはお流れになる」

足に任せる　特に目的を定めないで、気の向くままに歩き回る。「若いころは足に任せて、あちこち気ままな旅をしたものだった」

足場を失う　何かをしようとする時のよりどころが無くなる。「国内大会で敗れ、世界大会進出への足場を失ってしまった」

足場を固める　何かをする時に土台をまずしっかりさせ

あ

る。「県議会で活躍し、国会議員への足場を固めた」

足踏みをする 何かの事情で物事の進展が妨げられ、同じ状態にとどまる。「思いのほか輸出が伸びず、売上高が足踏みをしている」

味もそっけもない 何の味もない様子。「型にはまった、味もそっけもない年賀状」

足下から鳥が立つ 急に思い立ったように何かを始める様子。「足下から鳥が立つように帰って行った」

足下につけ込む 相手の弱みにつけ入って、自分の利益を図る。「人の足下につけ込んで金を巻き上げる」

足下に火が付く 危険が身に迫って、落ち着いていられなくなる。「仲間が逮捕され、ついに彼も足下に火が付いた」

足下にも寄りつけない 相手が自分とは比較にならないほど優れている様子。「あの人の頭のよさは、私なんか足下にも寄りつけない」

足下の明るいうち 〔類句〕足下にも及ばない

〔目〕が暮れる前の、先が見える明る

いうち、の意から」弱点や悪事などが見破られ、のっぴきならない立場に追い込まれる前に、策を講じるべきだということ。「足下の明るいうちに使い込みの穴

埋めをしておかないと、とんでもないことになる」

足下を見る 相手の弱みを見抜き、強い態度に出る。

「足下を見られて、安く買いたたかれた」

足を洗う 今までの好ましくない生活態度を改めて、堅

実に生活に入る。「やくざの世界から足を洗って、まじめに生きる」

足を入れる ある所に入ったり、ある社会とかかわ

りをもつようになったりする。「一度やくざの世界に

足を入れると、容易には抜けられなくなるそうだ」

足を奪われる ストや事故で交通機関が利用できなくな

る。「交通ストで通勤・通学の足を奪われた」

味を占める 一度うまくいったことが忘れられないで、

次にもまたそれを期待する。「初めて株でもうけたの

に味を占めてまた株を買う」

あ

足を掬う 相手のちよつとしたすきをねらい、予想外の手段を用いて、負かしたり失脚させたりする。「対立候補に足を掬われ、落選の憂き目を見た」

足を出す ↓足が出る

足を取られる 障害物があつたり酒を飲み過ぎたりして、思うように歩けなくなる。「ぬかるみに足を取られて転んでしまった」

足を延ばす 予定していた所よりさらに遠くまで行く。

「京都へ行ったついでに、神戸まで足を延ばして、息子の家を訪ねてきた」

足を運ぶ 何かの目的で、わざわざそこまで出掛ける。

「何度も足を運んで、やっと面会が許された」

足を引っ張る ①他人の成功や出世のじやまをする。

「同業者に足を引っ張られ、商売が苦しくなる」②大勢で何かをする時、その人が全体を不利な立場に追い込むようなことをする。「四番打者の不調がチームの足を引っ張っている」

足を踏み入れる 危険な目にあつたり、トラブルが起きたりすることを覚悟の上で、あえて何かの中に入る。

「僕は気が弱くて、ホステスの居るような店へは一度も足を踏み入れたことがない」

足を棒にする 長時間歩き続けて、ひどく足が疲れる意で、何かを探し求めて方々を歩き回ること。「足を棒にして探し回る」

足を向けて寝られない 恩を受けた人に対する感謝の気持ちを表わす言葉。「足を向けられない」とも。「私が今日あるのは石田さんのおかげなのだから、あの人に足を向けては寝られない」

味をやる ↓味なことをやる

与って力がある ある好ましい結果を得るに至った要因の中で、特にそのことが大きな役割を果たす。「今回の誘拐犯逮捕に際しては、一般市民の協力が与って力があった」

明日に備える 将来、事に当たってうまく対処できるよ

あ

うに前もって準備する。「明日に備えて、十分に体を鍛えておく方がいい」

汗水流す 労苦をいとわず労働に打ち込む様子。「多くの人が何年も汗水流して北海道の原野を開拓してきた」
【類句】 汗水垂らす

汗をかく 練り物のような食品が古くなって、表面がべとつく。「このソーセージは少し汗をかいてきた」

当たって砕ける 事の成否はともかく、こうしようと思つたことは思い切つてやってみろの意で、失敗を恐れず積極的に物事に取り組む心意気を表わした言葉。「当たって砕けるで銀行に融資を申し込んでみたら、意外に簡単に認めてくれた」

頭打ちになる 《相場などがそれ以上あがらなくなる意から》給料や地位などが限界に達して、それ以上あがらなくなる。「あと少しで給料も頭打ちになる」

頭が上がらない 引け目を感じることがあったり、弱みを握られていたりして、対等の立場で相手に接するこ

とができない様子。「子供のころのことを知られてい

るから、彼には頭が上がらない」
頭が痛い うまい解決や処理の方法が見いだせず、思い悩む様子。「今月中に納めなければならぬ税金のことを考えると、頭が痛い」

頭が堅い 既成の観念に凝り固まっていて、その場その場の状況の変化に即応した考え方ができない様子。

「うちの社長のように頭が堅くては、業界の競争に耐え抜いて行くのは容易じゃないね」

頭隠して尻隠さず 《草むらの中に隠れた雉子が、首は隠しているが尾が外に現われているのに気が付かないことがあることから》悪事や欠点の一部を隠して、全部を隠したつもりになっている様子をあざけって言う言葉。「犯人は、指紋はふき取って逃げたが、頭隠して尻隠さずで、庭に足跡を残していった」

頭が下がる 普通の人にはできない献身的な行為などに對して、心から敬服する。「私財を投げ出して障害児の